

季節のおまつり

## 葛川の太鼓廻し

かつらがわ

琵琶湖西岸の山沿いを走る若狭街道を北に上つてゆくと山深くなり、やがて坊村に着く。七月十八日夜、大津市葛川の地主神社の例大祭には、氏子の若衆が白い法被に赤襷をかけ参拝し、身を浄めたあと少し離れた明王院へ向かう。同じころ京都の比叡山から来た天台宗の回峰修行僧たちも本堂に集まつてくる。回峰行の祖で明王院を開いた相応和尚が、平安時代の初め葛川の三の滝で修行中に滝壺で不動明王を感じた、そのことを再現したのがこの祭りと云われている。氏子神社の若衆と叡山の回峰行者の双方が行事を担つており、神仏習合の名残りを吉例として毎年斎行されている。

狭い本堂の中は薄暗く、氏子や見物人も混じりひしめきあい、太鼓が入つて来るのを待つ。やがて若衆がゴロゴロと太鼓を転がして本堂へ入場し、提灯に灯が入ると、若衆が自らの足を回転軸にして、太鼓のカン（取っ手）を持ち遠心力を利用して勢いよく回しだす。太鼓は木端や鉢の部分が板敷の床とこすれば

あつて、ゴーゴーという音が響く。これは滝の音を出すためであるという。その周りには先の割れたササラ竹を手にした若衆が盛んに床を叩きザー

という音をだす。

やがて音が止み、太鼓が斜めに立てられると、行者が縁の木端の部分に登り、しばし合掌するや、片足で太鼓をトンと叩いて床に飛び込む。飛び降りた時、行者が上手く着地すると豊作で、失敗すると不作であるという農耕儀礼の要素も入つている。

太鼓は叩くものと思っているが、まさか回して、その上に乗るとは驚いてしまった。五日間に渡つて明王院に籠つた回峰行者たちは無事修行を終え、花折峠を越えて比叡山に帰つてゆく。



若衆が太鼓を転がす



太鼓の上から飛び降りる行者

太鼓むかしばなし

## 太鼓胴墨書



太鼓胴の中の墨書

太鼓が作られる時、太鼓胴の内側に、製作年月日と製作者の名前を記す慣わしがあります。どの太鼓にも、外から見ただけではわからぬ、太鼓の歴史が隠されているのです。四月にお預かりした太鼓胴は、墨書きにより約二七〇年前の「寛保四年」に製作されたものだと確認できました。京都の太鼓師によるものですが、昭和八年、及び四十年には五代目卯之助の時代に弊社にて皮の張替をしました。江戸時代の太鼓でも張替をすればまだ使えますし、若い職人にとっては、当時の職人の腕を確認する良い機会もあります。



修復し、お納めされた若宮神輿

## 鶴岡八幡宮若宮神輿 修復

祭りとともに

鎌倉の鶴岡八幡宮様の本宮神輿及び若宮神輿を修復させていただいております。本年四月二十六日には、修理を終えた五基目の神輿が無事にお納めされました。

神輿の修復は一つとして同じものはありません。原型を損なわないよう木地や漆など、長年の経験と知識を元に進めます。昔の神輿は解体が難しい構造のものもあり、過去には組んだまま修理をしている箇所もみられましたが、今回は大分部分を解体でき、屋根の裏に「寛永元年」と製作年号が認められました。このように古くから受け継がれてきた神輿を目の前にすると、歴史の重みが感じられます。

来年度お納め予定の六基目の神輿も修理が始まります。



底抜屋台

浅草徒然につき

## 江戸祭囃子

東京では、葛西囃子、神田囃子、目黒囃子などがあり、「大太鼓」一、「締太鼓」二、「笛」一、「鉦」一（通称四助）で編成されます。鉦は他の四つの樂器を助けるという意味です。祭囃子はその笛、太鼓の音色が、神輿を担ぐ若者たちの威勢のいい掛け声と相まって、見物する人たちの心を浮き立てる魅力があります。

梅雨を迎える頃まで、下町のあちこちで祭礼が行われています。いつもどこからか、粹で軽快な江戸の祭囃子が聞こえる時期です。

今年印象に残ったのは、一日の渡御を終え、宮入りしてくる本神輿に先行して入ってきた町会の方々が、整然と参道に列を作り、一人ずつご社殿前で深々と一礼していく姿と、宮入りを遂げた氏子青年部の歓喜の涙。三社祭というと勇壮な神輿渡御が有名ですが、人々の心の中にある祭の本義を目の当たりにし、改めて祭の素晴らしさを感じる週末となりました。

代表取締役社長  
宮本芳彦

発行	株式会社宮本卯之助商店
企画広報室	〒111-10035 東京都台東区西浅草二丁目一 電話 03-3384-412241 <a href="http://www.miyanoto-unosuke.co.jp">www.miyanoto-unosuke.co.jp</a>

浅草では伊勢志摩サミットの影響で、例年よりも一週間早く三社祭を迎えました。ご来店のお客様やお世話になつてている方々、友人に親戚と多くご来訪を頂き、我が家も賑やかなお祭となりました。神様の思し召しか、三日間素晴らしい好天に恵まれ、無事且つ盛大にお祭を終えた後の浅草の町はどこか誇らしげに見えます。

今年印象に残ったのは、一日の渡御を終え、宮入りしてくる本神輿に先行して入ってきた町会の方々が、整然と参道に列を作り、一人ずつご社殿前で深々と一礼していく姿と、宮入りを遂げた氏子青年部の歓喜の涙。三社祭というと勇壮な神輿渡御が有名ですが、人々の心の中にある祭の本義を目の当たりにし、改めて祭の素晴らしさを感じる週末となりました。